口腔の役割

老猿（ろうえん）

つい今しがたまで大鷲（わし）と格闘し、取り逃がしたものの左手には鷲の羽を握りしめ、鋭い視線で空を見つめる猿の像。

作者の高村光雲（たかむら こううん）は江戸浅草生まれ。幕末明治の動乱期を生きた近代の代表的な木彫家です。彫刻家・詩人として著名な高村光太郎の父親としても知られています。

この作品に取りかかろうとするころ、光雲は長女を 16 歳で亡くしています。光雲は何も手につかないほど落胆したそうですが、制作を通じて気力を取り戻していったそうです。この『老猿』の迫力は、娘を失った悲しみとそれを克服しようとする光雲の気迫が一刀一刀に込められ、明治 26 年（1893）に完成し、シカゴで開催された万国博覧会に出品され優等賞を受賞しています。

話が変わりますが、最近、高齢者のリハビリテーションや栄養の分野で『老嚥』という言葉が使われるようになりました。漢字は異なりますが、こちらも読み方は同じ「ろうえん」です。『老嚥』は健常な高齢者が加齢によって起こる嚥下（えんげ）機能の低下のことをいい、脳卒中など、他の疾患が原因で起こった嚥下障害と区別する言い方です。身近なもので例えれば、「老眼」と同ように使われる言葉です。嚥下の機能の低下は体力、そして身体機能の低下に直結するため老化の進行を早めます。

加齢に伴い誰もが避けることのできない『老嚥』。しかし舌や頬（ほほ）の運動や首や肩の運動などの筋力トレーニングで改善させることができるほか、かかりつけ歯科医院で義歯を調整しておくことも大切です。

木彫家として生涯現役を貫き長寿をまっとうした光雲、そしてこの力強さみなぎる年老いた猿、いずれも『老嚥』とは無縁だったのかも知れません。

老猿　明治 26 年（1893）木造

高村光雲（1852~1934）作

東京国立博物館所蔵

国宝・重要文化財

＜参考＞

東京国立博物館ホームページ　http://www.tnm.jp/

【歯科口腔外科診療部長　今井　正之】